

## 江戸の坂道散策

## 三分坂 (港区)



1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。著書に『江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞出版）、『江戸と東京の坂』（日本文芸社）がある。

山野 勝 Yamano Masaru  
坂道研究家

**港** 区赤坂五丁目5と七丁目7の間、一ツ木公園（東側）と報土寺（西側）の間を上っていくと、正面にTBS放送センターに突きあたり、そこを直角に屈曲する急坂がある。この坂を「三分坂」という。昔は今よりもっと急峻で、荷車を運び上げるには難渋を極めた。

坂名の由来は、荷車を後押ししてもらったとき、車賃を銀3分ほど増額したためという。また、坂下は沼沢地であったが、その渡し賃が1分だったのに対し、坂の荷上げ料金が3分だったからという説もある。「3分」は銀1匁の10分の3の重量単位で200円程度。「3分」なら1両の4分の3の通貨単位なので何万円にも相当。割増し料金なら「3分」が適当と思えるので、「ぶん」の読みが正しいといえる。

この三分坂を魅力的にしているのは、報土寺に残る練塀の美しさにある。練塀は粘土と瓦が交互に積み重ねられていて、坂道に沿って迫り上がり、さらに内側に弓なりになっている。これは、練塀が坂道の傾斜と道筋に合わせて造られているためだ。

川柳に「中条流三分坂に眉ひ



報土寺にある雷電為右衛門の墓。

そめ」というのがある。中条流とは中条帯刀を祖とする産婦人科の一派だが、江戸時代には堕胎を業とする者が多かった。夜半になると、不貞の子を流産にしたいと望む女たちが、この坂上からわざと転げ落ちたという。中条流にとっては商売敵になった。

明治に入ると、坂上一帯には近衛歩兵第三連隊が置かれた。この坂にも、軍靴の音が鳴り響いていたのである。さまざまな記憶を秘めて、三分坂は今も在り続けているのだ。

## コラ公堀 一服茶屋

三分坂の坂下にある報土寺には、江戸時代の名力士・雷電為右衛門とその妻の墓がある。雷電は身長197センチ、体重168キログラムの超大型力士で、21年間現役を勤め、254勝10敗という驚くべき成績を残している。谷風・小野川とともに、天明・寛政期の相撲黄金時代を築いた。

また、本堂の右には雷電の手形を刻んだ石碑が置かれている。その巨大さには驚かされる。

三分坂アクセス▶東京メトロ千代田線の赤坂駅7番を出て右折して進み、赤坂五丁目交番前の信号を右折すると、三分坂の坂下。正面に報土寺がある。徒歩4分。